

●1992

正月の3日、このとき初めて富士の総本部道場に行った。「お正月特別祝福」「五大エレメントのイニシエーション」という2つの特別なイニエーションを受けに行くためだ。いずれも参加費5万円、しめて10万円。あとバス代もいくらか。

イニシエーションってのは麻原言うところによれば、修行法や靈的なエネルギー、体験などを与える「秘伝の伝授」ということらしい。靈的なエネルギーって何なのかということは、大澤真幸の「虚構の時代の果て--オウムと世界最終戦争」(ちくま新書)の第三章、「サリンという身体」のなかに麻原の著作よりコンパクトかつわかりやすく書かれているので興味がある方はそちらをお読み下さい。

そのときは、まず、昼ごろから「お正月特別祝福」がはじまり、ここでは麻原の説法やら瞑想、経行(きんひん)という歩きながら内省する修行などが行われた。あと、パンみたいなものや修法された飲みものなどをもらったのだが、これといった華やかな体験ができなかったところを見ると、それらは「靈的な修法」だけしか施されていなかったようである。それらもろもろが6、7時間あって、引き続き「五大エレメントのイニシエーション」が行われた。これは、申し込んだ信徒一人一人が壇上にいる麻原の前に座り、眉間に親指をあてられたり両の耳のあたりにかかる息を吹きかけられたり、というようなことを一人あたり10秒くらいずつだったか、流れ作業で受けていくもので、心がかくなくなった、とか、真理の教えが深く納得できるようになった、とか、いろいろ変化を報告する人が多かったようなのだが、私には取り立てて何もおこらず、修行が足りないから何もおこらないんだろう、と反省するくらいであった。

すべてが終わったのが、夜の10時だったか11時だったか、かなり遅くで、東京に戻ったところには電車は動いてなく、道場でバクティーなり瞑想なりして朝まで過ごすこともできたのだろうが、そのときは一刻も早く解放されたい気分が強く、歩いて下高井戸から新宿は中井にあるアパートへ帰ったことを覚えている。

修行が足りないなあ、という反省は反省として、毎日道場に来るような模範的な信徒にはなかなかかなりきれず、とりあえず自分のできることといたら、布施だ、もっと布施をしなければ、とは思っていた。そこで2月のあたまにかなり悩んだ末決断し、今度は50万円振り込む。この布施功德によって家族を導ければ、と思い、そのころ多に喧伝していた、オウムがロシアから招待を受けた、というニュースをもって、前年正月以来の二度目の帰省をはたす。前年に帰ったときは、オウムについてほとんど話をすることもなく、人をオウムへと誘う初めての積極的なアプローチであった。

盆、正月にもろくすっぽ帰らない奴が、2月(3月だったかもしれない)なんて中途半端な時期に帰ってきてオウムの話しをしだしたことには、家の者も多少びっくりしたかもしれない。どんな説得をしたのかといえば、ロシアから招待がきたくらい認められている、とか、もと宇宙開発事業団の人やもと弁護士や東大出身者や、そういう弟子がたくさんいて凄い、とか、私にとってもオウムへの信頼のもとになった、俗な権威付けをおおいにまくしたてた。教義的な話しもしたのだが、これはあんまりかみ合ってなかったんじゃないかと思う。麻原の言う、信仰に入るための出発点、「この世は苦である」という認識(というか定義)を納得させようとして「どのみちいつか死んじゃうでしょ」とか言ったんだが、納得してんだかしてないんだか曖昧な会話に終始し、もどかしかった覚えがある。初めからオウムを信じていたうえで「この世は苦である」という定義を受け入れた私とは違って、ときには苦痛も味わうだろうが、おおむね平穏な生活をおくっている人間に、いきなり「この世は苦である」ということを納得させるには、どだい無理がある。なんの手応えも感じず、麻原の著作をいくつか置いて、「ま

たすぐに来るから」みたいなことを言うくらいなんとか入信させようとはりきっていたのだが、以後、結局一度も誘いをかけることはしなかった。

電話のおかげで、2、3週間道場に行かないと、「修行しましょう。道場に来ましょう」という連絡がくるので、無理のない範囲で定期的に足を運ぶようになった。電話であれ直接にであれ、ああしたほうが良いですよ、とか、こうしたほうが良いですよ、とか指導されるのが嫌だったのである。なにしろ麻原の教義を共有している以上、出家している直弟子（在家信徒の指導を行う弟子を師と呼んだ）の言うことはよくわかり拒否のしようがない。師の言う通りにしていればいずれ出家せざるを得なくなる。そこまでの覚悟はなかったし、「明日も道場に来ましょう」とか言われて来たくない時は嘘をつくほかに、嘘は悪業になると教えられていた。（実際に仕事があって、「仕事です」と答えても、「夜は来られないの」となる。なにしろオウムは24時間営業だった）。師と話をすることだけで、私の望むオウムとのほどよい距離が保てなくなるのである。だから、電話がかかってこない程度には道場に顔をだし、道場でもピラ折りのバクティーのようなことをしているだけでは気軽に声をかけられやすいので、この時期一生懸命にやったのが、新しく始まっていた基礎教学システムであった。

このシステムが良かったのは、麻原の説法が入った教本とテープがセットになっていて、ある課程のテストを受けるためには、その課程のテープを3回だか5回だか聞かなければならなかったところで、ヘッドホンでも付けて教学していれば声をかけられずに済んだのである。第一課から第十課までそれぞれに一級二級三級とあり、一課一級のテープを聞いてテストを受ければそれで一時間くらいは過ぎる。穴埋め4択の問題を全問正解しないと合格できなく、間違えればまたテープを聞き直さなければならないから、そのぶん全課程を終了するのにさらに時間はかかり、そのおかげで師と話をする機会がぐっと減ったため、このころはかなり気楽に道場に行けた。

そうは言っても頻繁に顔を出しているうちに知り合いの師も一人、二人とできてきて、全く話をしないというわけにもいかない。4月ころだったか、ある師に「50万振り込まなかったか」と聞かれ「振り込みました」と答えると、5月に30万円の特別イニシエーションで小乗のツァンダリーというのがあるのでせっかくだから申し込まないかという。イニシエーションでは何人かまとまって修行法だとかエンパワーメントとか受けるので、私の現世的な生活にまで踏み込んだ指導をされることもなく、心理的負担が少なかったし、「ツァンダリー」とかいう瞑想法は高弟たちの体験談などでも度々でてくる、そうとう効果的（神秘体験なんかをするために）な瞑想法らしいということは知っていたので喜んで申し込んだ。すると、同じ日に日に大乘のツァンダリーってのもあってそれは50万円だから、あと30万なんかかすれば両方受けられるし功德もつめますよ、といわれ、50万振り込んでいたせいかこんどはそれほど苦もなくさらに30万払うことにした。この年はそれまでにロシア救済基金とかほかにもちょろちょろ布施していて、この30万円で蓄えていた金をほとんどはきだしてしまった。当然のことながら損したなんて気はこれっぽっちもない。

この4月にはシークレットヨーガという一人一人が麻原と直接面談し、エネルギー状態を霊視してもらってそれぞれに合った修行法を伝授してもらうというイニシエーションも受けている（3万円か5万円くらい。この時期このくらいの差はどうでもよかったので覚えていない）。教学やマントラ何万回といった基本的な修行法のほかに、それまでどの著作でもお目にかかれなかった修行法として、食事のとき、のどにグル（麻原）を観想しなさい、というものがあつた。ためしてみるとわかると思うのだが、誰かの姿を思い浮かべて、それがのどにいと想像しながらの食事ってのは味がわからな

くなる。これが結構つらくて、たまにしかやらなかったのだが、それでも何度かためしているうち、麻原の姿をイメージするだけで、映画なんかを観てて感動したときにおこるのと同じ、背中から頭にかけてのしびれるような快感があらわれるようになってきた。今から考えれば、映画を観てて感動したときにおこる快感がべつに神秘的でもなんでもないように、麻原を良きものの源泉として奉じている者が麻原をイメージするだけで感動しい気持ちになるのは別に不思議でもなんでもない。当時の私も、こういう快感がおこることを不思議だとは感じていなかったのだが、それは、「さすが先生の修行法には力があるなあ」と、そういった意味であたりまえだと思っていた。

総額80万円も払ってうけたイニシエーションの方は、小乗、大乘それぞれに瞑想の仕方が書かれた奥儀書とビデオがあり、伝授のときはそれを一通り見ながら説明を受けるだけで、なにか秘密の怪しい儀式みたいなことはなかった。どんな瞑想法だったかという、自らを女性に見立てたり麻原に自分の最も好きなもの（現世的な）を供養したり何々色の光りに包まれるところを想像したり、といった感じでイメージの操作を行うのが目的だったのだと思う。ある信徒の話で、家で寝転がってこのビデオを見てただけでいろんな体験をいただいた、なんてことも聞いていたので、私のようなまけにはもってこいの修行だったのだが、うちにはビデオがなく、この瞑想法をためすことはなかった。だからといって、80万円を無駄にしたというわけではなく、私にとっては布施することそのものの方が肝心で、秘儀とか瞑想法とかはいただければもうけものな「おまけ」といってもいいものであった。

ただ、一つだけどうしても受けておきたいイニシエーションがあった。それは、「真理教」の前身「神仙の会」のころから行われていた「シャクティーパット」といわれるもので、80年代に入信しツァンダリーまで受けてるような古参信徒なら受けていないのがおかしい、最も基本的なイニシエーションだった。これの難点は布施の額ではなく（たかだか3万円くらいだったし）、一コマ3時間の基礎瞑想セミナーとやらを20コマこなさなければならなかったところである。やることはアーサナ（体操）とか呼吸法とか蓮華座を組んで瞑想するとか、たいしたことじゃないんだけど、教学のように好きなときに来て好きなときにテストをうけ、短い時間しかいなかったとしても好きなときにこっそり帰れるのとは違い、決められた時刻に始まり決められた時間ずっと師の指導のもとにいななければならないというのは、非常な心理的負担であった。それでも、シャクティーパットを受けようとしたのは、それによってオウム信徒としての印を付けてもらうようなイメージがあったからだ。麻原もどこかでそんなようなことを言っていたと思う。

6月28日に行われるという、マイトレーヤ正悟師（上祐史浩）のシャクティーパットに向けてこの年の6月はほとんど毎日杉並の道場に通り、前日27日にようやと20コマ終えることができた。

シャクティーパットそのものは、私が横になっている頭のところに師が座り、眉間のところに指をあててグリグリしながらエネルギーをいれてもらうということを十数分してもらって、あとはこんな風にしたほうがいいですよ、という修行や生活上の注意を簡単にしてもらっただけのことだったのだが、私にとっては一つの大きな区切りになったような気がした。在家でやっていくための最低限の保証を得たように思えたのである

（これで未来世でもオウム、真理とつながっていられるだろう）。かってに一区切りつけてしまった私は、この後、バルセロナ五輪なんかが始まったこともあって（ちなみに出場したわけではなくてテレビを見たいがために）、再び道場から足が遠のくのであった。

秋のインド巡礼ツアーや青山の新道場開設の準備のためか、道場に行く回数がかなり

減った割にはそれほどオウムからの電話はなかった。自分のほうも留守電にしておいて、なるだけ直に話をしないようにし、この年の後半にした修行らしい修行は、12月に青山で行われた「グルヨーガ・マイトレーヤ・イニシエーション」(30万円)を受けたときくらいであった。これも基本的には小乗のツァンダリーとかと同じく、イメージの操作をする瞑想が中心のものだったが、伝授のとき瞑想法の説明をするだけでなく、夜から朝にかけて実際にその修行をやってみるということだったので、現世モードに入っていた私には、この長時間拘束は精神的にかなりきついものがあった。

この「グルヨーガ・マイトレーヤ・イニシエーション」の前後だったか、緊急の集会在青山で開かれ、そこでは、アーナンダこと井上嘉浩が非常に切迫した様子で終末は近いということを強調し、もっともっと真剣に修行をしなければいけないと、なかばどう喝のような説法を行っていた。そのころ機関誌などでも「終末」を強調するようになってはいたが、前に書いた通り私は麻原の予言に対しては少しひねくれた解釈(信徒の修行を進めるための方便なのではないか。タントラ・ヴァジラヤーナはなんでもありなんだし)をしていたため、全面的にはストレートに受け止められなかった。現に、井上だけでなくオウム全体が信徒にもっと修行をするように言い、信徒のほうも真剣に取り組みはじめている。私の印象では、麻原の予言は確定的なものでもなさそうだし、もし本当にハルマゲドンがおこって死んでしまうことになってもシャクティーパットはじめいろいろなイニシエーションを受けてそれなりに布施もしているんだから、そうそう悪い生まれ変わりもしないだろう、と、今まで以上の修行をしていくのにはどう考えても根性が足りないと思っていた私は、この集会でみた強硬な姿勢に、オウムに対して完全に腰が引けてしまった。

[1](#) [2](#) [3](#) [4](#) [5](#) [6](#)